

まとめでは、太陽の位置によって判別しにくいこと、色彩も深緑と紅葉の時期などで違うこと、ホイッスルの音には大差があることも判断できた。

P3ポイントでは、ビバークに関する講習を行った。適地を探してツェルトビバークをこなさいという課題。

意見交換の際、北村先生から自分は手早く行う為、ツェルト側の細引きは最初から取り付けていること、ザックの雨蓋に入れ寒冷期の休憩時に防寒に使用しているというコメントがあった。また、受講者に聞くとビバーク用のレスキューシートは持っていても使用したことが無い人が大多数であった。

P4ポイントでは、岩場で3m程度の高さから転落し、腕の擦過傷、足首の骨折、全身打撲という想定で救出方法の課題を行った。

3S ABCDEでの状況確認、擦過傷の包帯処置、足首骨折箇所のサムスプリント固定、ヘリの要請、転落岩場からのテープスリングによる背負い搬送救出、ムンターヒッチによる確保、更にヘリ飛来地点までのツェルト搬送、ヘリの誘導までの一連の流れを行った。リーダー指揮下のもと分担、協力しあつての作業の大切さを学んだ。

講義2は、岳連会員で山口県総合医療センター整形外科医の守屋淳詞医師に「登山者の膝痛対策」と題して、膝痛の原因と対応について講義を戴いた。受講者に「膝痛」を経験した人が多く、質疑応答では、膝痛を持つ参加者からの経験談、対応(手術・ストック・サポートタイツ等)について意見が出、必要に応じ守屋医師のコメントを戴いた。サポートタイツについては効果を実感する旨の話が多かった。

また、サプリ使用の効用については有効性が確認できないものもあるし、肝障害を起こすサプリもあるので、注意が必要とのコメントもいただきました。

3日目は「中高年登山の現状と問題点」と題して、登山研修所専門調査委員長の北村憲彦先生の講義。遭難及び遭難者は相変わらず右肩上がりの傾向を示してい



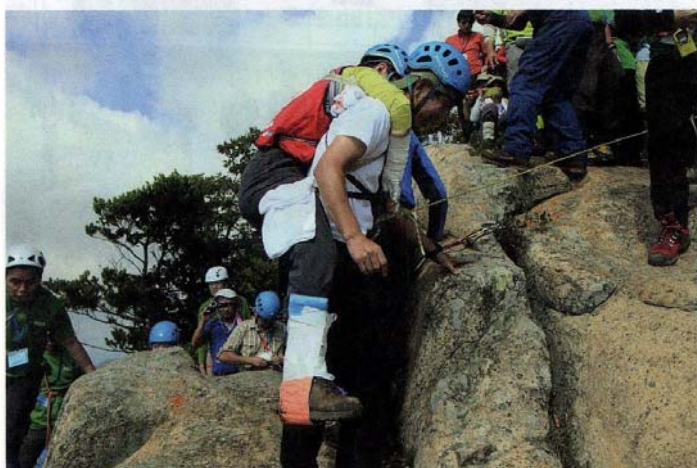
ツェルト・ビバーク講習

る。定年前後に登山を始める方が多く、大きな山への登山を安易な遊びと勘違いしている傾向があり、事故の比率を押し上げていると思われる。事故の内容から体力づくり、登山知識やリスク管理の習得が必要であり、特に単独登山者の死亡・行方不明の比率が高いことから、山岳会や登山グループへの加入等も必要と講義されました。

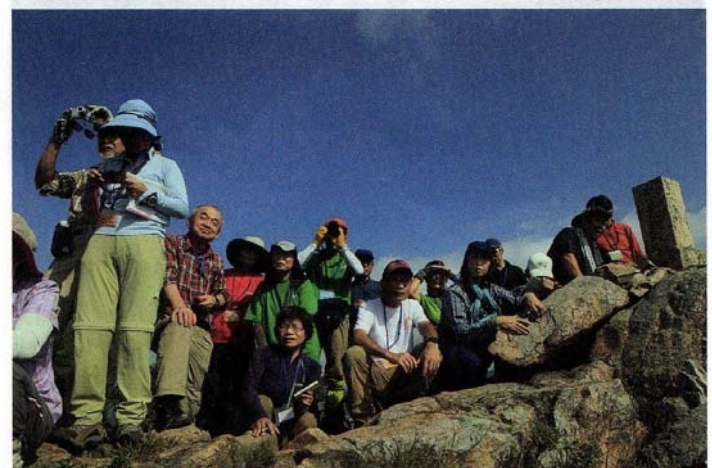
続いての研究協議は「低体温症」「転倒・転落・滑落」の2つのテーマについて6グループに分かれての討議でした。各人が思いつく状況(どこで、いつ、どんな状況で・なぜ・原因等)をキーワードとして、皆でメモ紙に書き連ね討議の上模造紙に整理し、重要ポイントを絞り込む方式がとられ、最後にグループ代表が発表し、受講者全員で情報の共有化ができた。

3日間に亘る講習の期間中は天候にも恵まれ、予定通りの内容が実施でき、また、受講者の積極的な質疑や行動により、講義内容を取り込んだ実技も楽しく運営することができました。事故もなく安全に講習会が終了できたのは偏に受講者や関係各位の協力の賜物と厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

(山口県山岳・スポーツクライミング連盟遭難対策委員長
坂口仁治)



岩場での救出講習



講習会の参加者(P2ポイントで)